

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 25 回
 第 5 章 古田足日先生
 その 3 社会にひらく「散文」(下)

昨年(2024 年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社 1974 年)の刊行 50 周年だった。私が古田足日先生(1927~2014 年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳だった。

階段下の本棚

東京・東久留米市の古田先生のお宅のリビングから 2 階の先生の書斎へ上がる、らせん階段の下にある本棚には、SF の本が詰まっていた。早川書房の『ハヤカワ・SF・シリーズ』や創元社の文庫である。

昨年の夏、神奈川近代文学館で開催された企画展「没後 10 年 古田足日のぼうけん」の図録を見直すと、その本棚の写真が掲載されている。——「並はずれた読書家だった古田。三万冊をこえる膨大な蔵書をおさめていた自宅書庫の一角には、SF の本ばかりをそろえた「SF 文庫」とよべる本棚があった。／日本でまだ SF 作品がめずらしかった時代から愛読していた古田は、『現在の奥にかくれている未来』をつかむため、その方法を見童文学にとり入れている。デビュー作になった『ぬすまれた町』も、そんな挑戦のひとつだった。」「SF 文庫」は、企画展を担当したスタッフの名づけだろうか。古田先生やご家族が、そのように呼んでいたという記憶はない。本棚の縦長の写真を見ると、上から 7 段めまで数えられるのだが、その下に、少なくとももう 1 段ありそうだ。本棚の上にも、壁や階段の裏側に、もたせかけるようにして本がならべてある。

図録の「《現実の奥にある未来》をつかむため……」という解説は見事だが、これは、この連載の第 18 回(第 5 章「古田足日先生」その 2(中の後半))で一度引用した古田の文章、「未来と現実——新しい児童文学創造の一試論」(『信濃教育』1960 年 3 月)にかかわっている。「未来と現実」の初出雑誌のページも展示されたのだけれど、古田は、石川淳の「鷹」(『群像』1953 年 3 月)や安部公房の『第四間氷期』(講談社 1959 年)といった作品を紹介しながら、「ぼくたちは突然変異をこそとらえなければならないでしょう。」と述べた。

八月十五日はぼくにとっては突然の出現でした。そして、その日がやってくるためには、毎日毎日、未来の要素がつみたてられていたはずでした。とすれば、現実のなかには、未来と現在が共存しています。あすのピースを作る人びとを未来とする見方(これは石川淳「鷹」のこと。ピースはタバコ—宮川注)、このデフォルメされた見方のほうが、リアリズムよりも現実を立体的につかんでいるのではないのでしょうか。(引用は『児童文学の旗』理論社 1970 年による)

連載第 18 回では、1960 年代中ごろから後半にかけて、雑誌をかえて 2 回連載されたけれども、未完になった古田の作品「瑞穂の国ゼロ時間」と関連させて、ここを引用したのだった。「瑞穂の国ゼロ時間」は、戦時下の世界で、あるべき未来の要素の積み立てを試みる物語だ。

古田が引き合いにした「鷹」には、『明日語文法』や『明日語辞典』といった書

物が出てくる。『第四間氷期』では、ある組織が、予想される陸地の水没にそなえて、胎児から水棲人間を養育している。「鷹」はS F 的ともいえる短編、『第四間氷期』は日本ではじめての本格的なS F 長編小説といわれるが、古田足日は、「未来と現在が共存してい」る現実をつかむ方法、あるいは、「現実の奥にある未来」をつかむ方法として有効なのがS F だと考えたのではないか。

1970（昭和 45）年6月に少年文芸作家クラブが発行した『別冊少年文芸 子どもとS F』に寄稿した「日本の児童S F」で、古田は、瀬川昌男の『火星にさく花』（『少年少女世界科学冒険全集』15、講談社 1956 年）を「戦後、本のかたちをとった、最初の子どものS F」とする。——「火星に咲く^(ママ)花」は本格S F を目指す作品であったが、一方、純文学系というか、児童雑誌（大衆的児童文学のメディアの意味一宮川注）とはほとんど無関係な方から、変格S F、またはS F もどきのような作品が出現してくる。ぼくの「ぬすまれた町」がそうであった。」

同じ別冊の座談会「S F と児童文学」（司会・北川幸比古）にも、古田は、石川光男、亀山龍樹、福島正実とともに出席して、『ぬすまれた町』をS F 的なものの「はしり」と述べている。企画展の図録にもタイトルがあがっていた、古田のデビュー作『ぬすまれた町』は、1961（昭和 36）年、理論社刊。

S F とファンタジー

『別冊少年文芸 子どもとS F』という見たことがなかった雑誌のコピーを送ってくださったのは、児童ものも書かれるS F 作家の東野司さんだ。昨年（2024 年）、私は、『日本児童文学』2024 年9・10月号の特集「長いふしぎの物語—ファンタジー、S F—」の共同討議「日本の児童文学における「長いふしぎな物語」とは？～伝承からの遠心力と求心力～」（司会・奥山恵）に、きどのりこさん、東野さんといっしょに出席した。雑誌のコピーは、共同討議の準備の一つとしていただいたのである。

出席者は、事前に、話題にしたい作品を10 ずつあげたのだが、私が10 のなかに古田足日の『ぬすまれた町』と「瑞穂の国ゼロ時間」をあげ、東野さんも「瑞穂の国ゼロ時間」をあげたから、共同討議の場で語られた。東野さんが、古田自身が子どものS F（もどき）の「はしり」とした『ぬすまれた町』をS F ではなく、ファンタジーと位置づけ、「瑞穂の国ゼロ時間」をS F としたのは意外だった。東野さんの発言から抜き書きする。

タイムトラベルが何故起こったか、そのメカニズムをきちんと書くのがS F です。児童文学でタイムトラベルを扱った作品では、何かふっとタイムトラベルしていた、という形が多いのです。ファンタジーとしてはそれでいいのですが、S F ではそのメカニズムが必要です。「瑞穂の国ゼロ時間」では、タイムマシンの事故が起きたから時空間を移動して、パラレルワールドに来ていると理由をはっきり書いている。なおかつ三〇世紀の人は三〇世紀の意識を持って、昭和四〇年から来た人は昭和四〇年の意識を持って、昭和一七年の世界を生きている。この人はこの時代を生きていたから考え方はこうと、押さえていかなければならないことをきちっと押さえている。「I F、もしもこうだったら」というS F の形に則った設定です。

S Fというのはこれこれの世界に飛んだとはっきりわかるように書くものです。ところが『ぬすまれた町』ではそれをはっきりさせない。

司会の奥山恵さんも、『ぬすまれた町』は「ふつう」と「ふしぎ」が区別されていないで地続きでつながっている。でも「瑞穂の国ゼロ時間」ははっきり区別されています。」と意見を述べた。

「未来」のつかまえかた

古田足日には、デビュー作『ぬすまれた町』や未完の「瑞穂の国ゼロ時間」のほかにも、「現実の奥にある未来」をつかまえようとした様々な物語がある。それらには、二つのタイプがありそうだ。一つは、「未来」が子どもたちの日常に投げ込まれるもの。たとえば、『ロボット・カミイ』（福音館書店 1970 年）である。

最近は、ファミリー・レストランなどで配膳ロボットを見たりすることも多くなって、ロボットがずいぶん身近になったが、『ロボット・カミイ』の原型（『幼児と保育』1967 年 6 月増刊）や初出（『母の友』1969 年 8 月）の書かれた 1960 年代、ロボットは、はっきり「未来」だった。

私は、テレビアニメ「鉄腕アトム」（フジ TV 系列 1963～66 年）や「鉄人 28 号」（フジ TV 系列 1963～65 年）を熱心に見た 60 年代の子どもで、小学 4 年生の夏休みの自由研究では、人のかたちのロボットの工作をした。大きな直方体の段ボール箱がボディだ。それよりは小さい立方体の段ボール箱を頭にして、プラスチックの漏斗を埋め込んだ。漏斗の円錐状の上部がロボットの口だ。2 本の脚は、近所の酒屋さんにわけてもらった 1 升びんの化粧箱である（腕はどうしたのだったか……）。2 学期の始業式には、私の等身大に近いロボットをかつぐようにして登校した。

おかあさんに段ボールの箱を捨ててきてとたのまれた、『ロボット・カミイ』のたけしと、ようこも思いつく。

「そうだ、ようこちゃん。ふたりのほこをあわせたら、ロボットができるよ。」

「ほんとだ。そうしよう。せかいーりっぱなロボットをつくろうよ。」

「こうてつせいのピッカ、ピッカのやつを、だ。」

（引用は『全集古田足日子どもの本』1、童心社 1993 年による。以下も同じ）

「かみのはこでつくったロボットだから、なまえはカミイにしよう。」——子どもたちの日常に「未来」が投げ込まれてきたのではなく、子どもたちが「未来」を創造したのだ。カミイは、わがままで、「こうてつせい」のロボットだといばるけれども、ほんとうは紙だから、水には弱い。それでも、幼稚園の「オオカミと七ひきの子ヤギ」の劇に 8 匹めのヤギとして出演して、悪いオオカミをやっつけたり、大活躍をする。ロボット・カミイという「未来」の創造によって、子どもたちの遊びや生活は、より楽しく豊かになる。

『れいぞうこロボット』（盛光社 1969 年）には、れいぞうこロボットのガオリンがタカシの日常に投げ込まれてくる。ガオリンは、地球からずっと遠くにあるムツシャリ星の探偵で、火のロボットという危険なものが逃げ出したのを追跡してきたのだ。

冒険への出発

「ふるた・あかねは六つの女の子です。／ある日、あかねはおかあさんといっしょに、かさとうんどうぐつをかいに、さくらストアへいきました。」——『くいしんぼうのロボット』（小峰書店 1966 年。引用は『全集古田足日子どもの本』1、前掲による。以下も同じ）のはじまりである。これは、古田先生のひとり娘のあかねさんが主人公の物語だ。あかねは、ももいろの運動靴と、かぶとむしの絵が描いてある黄色いかさを買ってもらう。おかあさんが靴とかさに名前を書いているあいだに、あかねは、包み紙の裏に絵を描く。

あかねは、くつをはきました。ももいろの中の白いところに、あかねのなまえがかいてあります。左のくつには`ふるた`、右のくつには`あかね`。

あかねはうれしくなって、右からよんでみました。

「ね・か・あ・た・る・ふ——だわ。」

そとへ出て、かさをひらくと、かさのかぶとむしのりょうがわにも、`ふるたあかね`と、かいてあります。

あかねは、また右からよんでみました。

「やっぱり、ねかあたるふだわ。」

あかねが、このことをおかあさんに教えてあげようと思って、玄関のほうを振り返ると、家がなくなっていた。そして、そこにあったのは、あかねが描いた絵のなかの景色だった。かさをさしたまま、風に飛ばされたむこうには、ロボットの国があって、ネカア・タルフの冒険がはじまる。これは、日常に「未来」が投げ込まれてくるのではなくて、「未来」へと旅する、もう一つのタイプの物語だ。

『ぽんこつロボット』（岩崎書店 1970 年）は、何百年かあとの「未来」の物語だ。地球の日本の少年、ヨシノ・タローの家のお手伝いロボットがこわれてしまった。

「むかし、むかしのはなし——ではありません。未来の、未来のはなしです。」——これは、短編集『月の上のガラスの町』（盛光社 1967 年、童心社 1978 年）の「はじめに」の書き出しだ。引用した日本標準の『シリーズ本のチカラ』（注）版（2010 年）には六つの作品が収められている。これも、もう一つのタイプの物語である。

いまから何百年かあとには、月の上に大きなガラスのドームにおおわれた町ができている。ドームの下に、マンモス・アパートや空気清浄工場や農園がある。月は、地球よりずっと引力が小さいから、草木は見上げるほどの高さになる。引力が小さいせいで、体も軽くなるから、子どもたちは、その草を飛び越える。

ガラスの町の機械に管理される生活にうんざりしているサラリーマンが地球からやってきた悪魔に魂を売ろうとする話（「あくまのしっばい」）や、ひとり娘を亡くした父親の科学者が、むすめにそっくりのアンドロイドをつくる話（「アンドロイド・アキコ」）など、収録されている「未来」の物語をとおして問い直されるのは、現在の私たちのありかたそのものである。「未来の、未来のはなし」は、私たちの現在にひそんでいる問題を拡大して見せてくれる鏡だ。

11 月 31 日

サクラ団地のアキラの家の郵便受けに入れられた、サクラ銀行のカレンダーに

は、11月が31日まであって、12月には1日がない。カレンダーをくばっていたのは、赤い服のサンタクロースのようだ。12月1日は、アキラの誕生日だから、誕生日がなくなってしまう。ヒロコも、12月1日にいなかのおじさんがリンゴをおみやげに持ってきてくれるのを心待ちにしているし、ジローは、12月1日におとうさんとデパートに行ってミニカーを買ってもらうのが楽しみなのだ。『まちがいカレンダー』（国土社 1970 年）のはじまりだ。

翌日、目がさめると、11月31日になっていた。あすは、12月2日だという。大人たちは平気な顔をしているが、アキラたちが異常に気づく。

アキラが目ざめたとき、「ペーター—九号、ペーター—九号、応答せよ。」（引用は『全集古田足日子どもの本』5、童心社 1993 年による）という声が聞こえるのだが、先の共同討議の奥山恵さんの『ぬすまれた町』についてのことばを思い出せば、同じように、「「ふつう」と「ふしぎ」が区別されていないで地続きでつながっている」。地続きの 11 月 31 日の世界に、人間が頭のなかに響く声にしたがうロボットにされる「未来」があらわれるのだ。

『まちがいカレンダー』は、『ぬすまれた町』に似ている。東野司さんは『ぬすまれた町』を SF ではなくて、ファンタジーだとしたが、それなら、『まちがいカレンダー』もファンタジーだろう。『くいしんぼうのロボット』や『月の上のガラスの町』も、ファンタジーかもしれない。

しかし、東野さんは、「瑞穂の国ゼロ時間」は SF だという。また、評論「未来と現実」を思い出す。「八月十五日はぼくにとっては突然の出現でした。そして、その日がやってくるためには、毎日毎日、未来の要素がつみたてられていたはずでした。」——古田のこの切実なモチーフをになった作品が「瑞穂の国ゼロ時間」だ。だから、タイムトラベルの「メカニズムをきちんと書く」（東野さん）、つまり、より散文的な SF の方法を求めたにちがいない。

ことし（2025 年）、日本は、「戦後 80 年」をむかえた。これも、連載第 18 回で一度引いたものだが、伊藤英治編「古田足日年譜」（『全集古田足日子どもの本』別巻、童心社 1993 年所収）の「一九四五年・一八歳」から。

大阪府枚方・交野にある陸軍造兵工廠で火薬製造（学徒動員—宮川注）。火薬の原料がなくて、自給自足の塩づくりのため、大阪浜寺の海岸へ行く。浜寺で一晩ねた翌日が八月十五日＝敗戦。天皇の雑音だらけのラジオ放送を聞き、日本が負けたということがわかり、泣きながら海に泳ぎだした。天皇に申し訳ないと思う。まっ青な空、まっ青な海に浮かんだ点のような自分が、その後の自分の中にずっと突出した原風景として生き続けている。

古田先生の 8 月 15 日、古田先生の「敗戦」を思う。

（第 5 章「古田足日先生」おわり）

（注）

編集委員は石井直人、宮川健郎。

第5章「古田足日先生」関連年表

- 1927（昭和 2）年 11 月 29 日 愛媛県川之江町で生まれる。
- 1940（昭和 15）年 4 月、愛媛県立三島中学校（旧制）入学。翌年秋から学徒動員が始まる。
- 1945（昭和 20）年 6 月、大阪外事専門学校（のちの大阪外国語大学）ロシア語科に入学。
8 月 15 日、敗戦。
- 1948（昭和 23）年 9 月、大阪外事専門学校中退。
- 1949（昭和 24）年 4 月、早稲田大学露文科 2 年編入。すぐに休学して、故郷の分校の代用教員になる。
- 1951（昭和 26）年 4 月、早稲田大学に復学。「早大童話会」に入り、鳥越信、神宮輝夫、山中恒、鈴木実らと出会う。
- 1953（昭和 28）年 9 月、「早大童話会」の機関誌『童苑』第 19 号を『少年文学』と改題して発行。巻頭に「「少年文学」の旗の下に！」（少年文学宣言）を発表。同月、早大中退。「宣言」を深める評論を書き始める。11 月、齋藤文恵と結婚。
- 1954（昭和 29）年 6 月、鳥越、神宮、山中、鈴木らと「小さい仲間の会」を結成、同人雑誌『小さい仲間』創刊。
- 1959（昭和 34）年 9 月、第一評論集『現代児童文学論』（くろしお出版）
- 1960（昭和 35）年 長女あかね誕生。反安保闘争に参加。
- 1961（昭和 36）年 11 月、『ぬすまれた町』（理論社）
- 1966（昭和 41）年 2 月、『宿題ひきうけ株式会社』（理論社）
- 1971（昭和 46）年 この年から使用の小学校国語教科書（日本書籍）の編集委員になる。
- 1974（昭和 49）年 11 月、田畑精一と共作の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社）
- 1975（昭和 50）年 2～6 月、日本児童文学者協会主催・日本児童文学学校「第 2 期批評・評論教室」を主任の講師として担当。宮川が受講する。
- 1976（昭和 51）年 10 月、山口県立女子大学に新設された児童文化学科教授として単身赴任（79 年度まで）。
- 1981（昭和 56）年 9 月、「児童文学批評の会」を結成、『季刊児童文学批評』創刊（第一次は 83 年、6 号で終刊、第二次は 87～89 年、5 号で終刊。事務局は宮川）。10 月、日本児童文学者協会編『国語教科書攻撃と児童文学』（青木書店、編集委員をつとめる）。
- 1993（平成 5）年 11 月、『全集古田足日子どもの本』全 13 巻・別巻（童心社）
- 1997（平成 9）年 日本児童文学者協会会長に就任（01 年度まで）。
- 2014（平成 26）年 6 月 8 日、86 歳で永眠。

* 伊藤英治編「古田足日年譜」（前掲）および西山利佳作成「古田足日・略年譜」（『日本児童文学』2015 年 1・2 月号）を参考にしました。